カトリック札幌教区ニュース
Catholic Sapporo Diocese News

No.48
2025年1月

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部　〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10 Tel.011-241-2785 https://www.csd.or.jp

2025年 年頭司牧書簡

札幌教区の皆さんに
クリスマスと新年の
ご挨拶を送ります

カトリック札幌司教区
教区長　ベルナルド勝谷太治

「聖年」にあたって

今年2025年は25年おきに開催される「通常聖年」です。期間は2024年12月24日バチカンのサンピエトロ大聖堂の聖なる扉が開かれてから2026年1月6日主の公現の日に閉じられるまでです。札幌教区のような部分教会は2024年12月29日から2025年12月28日までとなります。今年の聖年は「希望はわたしたちを欺くことがありません（Spes non confundit）」（ロマ書5・5）をモットーとし、私たちが希望の巡礼者として混沌とした世界各地に希望のメッセージを届けるものとなるよう呼びかけられています。特に教皇フランシスコが就任以来2015年の神のいつくしみの特別聖年、教皇文書、シノドスの流れの中で強調され続けていること、裁く教会ではなく慈しみとゆるしに満ちた教会、全世界のすべての人に居場所がある教会、そしてシノダリティー（ともに歩む教会）を実現するため、私たち一人一人が回心し、出向いていくよう呼びかけられています。私たちはこの聖年を神の恵みやゆるしを「受ける者」としてだけではなく、「もたらす者」となるべく、「希望の巡礼」に出かけようではありませんか。

『見よ、それはきわめてよかった』

そして、昨年『いのちへのまなざし』以来となる司教団文書『見よ、それはきわめてよかった』が発表されました。これは総合的な(インテグラル)エコロジーへの招きです。2015年、教皇フランシスコは回勅『ラウダート・シー ともに暮らす家を大切に』を発表し、すべての被造物が互いに関連し合っており、私たちの生き方もそれと強く結び合わされていること、その為に互いの調和のうちに生きていく道を探るよう呼びかけられました。日本の司教団はこれに応え、2017年に司教団文書『いのちへのまなざし』を大幅に改訂し、環境問題についてより詳しく取り上げました。そして今回この司教団文書『見よ、それはきわめてよかった』を発刊するに至りました。

『ラウダート・シ』の中心的なテーマの一つである総合的な(インテグラル)エコロジーは、「神と、他者と、自然と、自分自身との」（LS10）調和ある関係を追求するもので、これらはそれぞれ分かちがたく結びついていて、私たちのライフスタイルの変革が呼びかけられています。本書ではこれを「観る」、「識別する」、「行動する」の3段階で考察し、具体的な行動をとるよう呼びかけをして

います。

「霊における会話」

昨年（２０２４年）、シノドス第２会期が終了しました。具体的な実りはこれから発信されてくることと思いますが、大きな実りとしては、教会における識別の手段として「霊における会話」が奨励され、浸透しつつあることでしょう。昨年の年頭書簡で、分かち合いによる識別について書きましたが、シノドスの会議で実際に行われた「霊における会話」はまさにその具体的な方法です。「霊における会話」が「分かち合い」と異なる点は、互いに傾聴し合うところは同じですが、その中に聖霊の導きを聴き取ることに主眼が置かれています。分かち合いは基本的に結論を出すものではありませんが「霊における会話」は饒舌な人も、口下手な人も、押しの強い人も、引っ込み思案な人も、全員が等しく発言の時間を与えられ、そして、そこに聖霊の「声」を識別するのです。その為に、話し、聴くこと同様、「祈る」ことが最も重要なことになります。数人の話を聞くごとに、あるいは分かち合いのステップが終わるごとに、必ず「祈る」ことによって、聖霊に耳を傾けることが大切です。こうして、単に聞きっぱなしになったり、単に意見を調整して合意を得たりすることではなく、意見の相違があっても聖霊がいま私たちをどこへ導こうとしているのかを識別することが大切なのです。このような方法は、これから皆さんにお願いする以下の事柄を検討していただくために最も有効であると思われます。

「霊における会話」は繰り返し実践することによって深められ確かな識別へと導かれるので、是非小教区等で実践し続けることをお願いします。

変革に向けて

さて、上にあげた教会の動きは信者一般に向けられた生き方の変革へと私たちを招くものですが、さらに、身近な教区のことに目を向けてみましょう。今までの私たちの教会の在り方を見直し、大胆に変革の道を進み始めるために皆さんにお願いしたいことがあります。２０２５年を「変革」の年としたいのです。慣れ親しんだ今までの教会の在り方を大胆に見直し未来への新しい在り方を共に模索していくために、信徒、修道者、司祭が一丸となって取り組んでいただきたいのです。昨年（２０２４年）６月、札幌地区宣教司牧評議会より、かねてから諮問していた事項への答申がなされました。この答申内容をいかに実施していくかについて皆さんにお願いしたいのです。具体的な内容に入る前に、これまでの経緯を簡単に説明いたしましょう。

２０２２年３月、わたしは札幌地区小教区再編諮問委員会（未来を語る会）を立ち上げ、逼迫した教区財政と司祭数の減少に鑑み、５年以内に実行可能な実効性のある小教区再編計画を出すように諮問しました。これに対して翌年３月小教区の司牧体制、財政、組織等の改革の具体的ビジョンが答申されました。具体的な内容にはここで触れませんが、この答申を実行するために、まず札幌地区から実施していきたいと考え、この答申内容を札幌地区でどう実行できるか検討するよう札幌地区宣教司牧評議会へ再諮問いたしました。これに対して、昨年６月に答申がなされたのです。聖職者にすべてを頼る体質（聖職者至上主義）から脱却し、信徒によって教会の維持管理、宣教、養成等を実施するための具体的提案がなされ、それら一部は「典礼」、「養成」においてすでに実施され始めています。そして、小教区再編についても具体的な提案がなされています。将来的に札幌地区を５つのブロック（チーム）に分けたチーム司牧の提案です。わたしは今回諮問するにあたり、議論すべき課題をあげるのではなく、実行可能な具体的な案を出すよう求めました。議論をして何も実行しない今までの反省から、答申が出されたならすぐに実現することを目指して具体的に動き出すことを明言しました。５つのチームに分けることが適当かどうかは後にして、このような体制を実現するための諸課題が具体的に挙げられています。そして、それをクリアーしなければ近い将来これを実現することは不可能です。そこで、取り組んでいただきたいことは以下の通りです。

- 今のブロック割の見直し
  （以下を実行すると元に戻すことが難しくなる為）
- 教会委員会、運営委員会をブロックで統合一体化し教会規約を統一する
- 小教区会計のブロックへの一本化
- 小教区の特別会計（建築資金、修繕費等）の札幌地区あるいはブロックへの一本化
- 地区会計の設置

当面、小教区を維持するた

めに教会事務（台帳管理、転出入手続き等）は各小教区に残しますが、将来的にはこれも一本化の方向へ進みます。これらを1年ないし2年以内をめどに実行したい考えです。その為、コロナで休止しているブロック会議を速やかに再開し、今年いっぱいの中で意見をまとめていただくようお願いします。また、答申を出した宣教司牧評議会が各ブロック、答申で言う各「チーム」の議論をリードしていただきたいと思います。

札幌地区の話になりましたが、他の地区の皆さんにも、地区を前述のブロックに置き換えて、同様の検討をするようお願いいたします。

「一粒会」

最後に、司祭の減少への対応策として今行われているのは、外国からの司祭の招へいです。しかし、言うまでもなく、本来的な意味で教区を担っていく司祭は地元で生み出すべきです。そして、司祭が召命を感じその道を歩み始めるには、支える人々、その母体となる信徒の共同体が生き生きと福音に生きている姿がなければありえません。昨年、「一粒会」の立ち上げを決定し、その規約を作成しました。今まで、一粒会は教区司祭を育成するための募金を意味していましたが、これからは教区に限らず修道会司祭修道者も含めて、召命を促進するための活動として札幌教区全体で取り組んでいきたい考えです。召命促進はすなわち教会共同体の活性化へとつながるものと信じています。

今回も長い文章になってしまいました。さらに、お願いが中心になってしまいましたが、札幌教区にとって「危機」は「機会（チャンス）」でもあることを信じ、希望の「聖年」を共に歩んでいきましょう。

聖年マスコット
Luce(ルーチェ)
（関連6ページ）

通常聖年始まる

自 2024年12月29日
至 2025年12月28日

教皇フランシスコは、バチカンのサンピエトロ大聖堂の聖なる扉を、２０２４年12月24日に開き、通常聖年の開始とすることを定めました。その後３つのバジリカ大聖堂の聖なる扉を開き、２０２６年１月６日の主の公現の主日にサンピエトロ大聖堂の扉が閉じられることをもって閉幕します。

教皇はこの聖年について「希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」（ロマ書５・５）と、聖年を公布する大勅書の中で示し、その中で神の恵みから希望を受け、神へと向かう歩みを強めていただく機会とするとともに、困難にある多くの人に希望をもたらす者となるよう招くものであると呼びかけられています。

私たち一人ひとりが新たな意識を持って自ら宣教に取り組もうとしている今、この地に神の慈しみそのものであるキリストの福音を運んだ先人達の労苦をしのびながら感謝して、神の愛と慈しみを雄々しく伝える証し人となることを願っています。

札幌教区ではこの通常聖年の公布を受け、２０２４年12月29日から２０２５年12月28日までの聖年期間に、次の３つの項目を大切にしていただくよう示しました。

(1) 巡礼指定教会

▼札幌地区
北一条教会（カテドラル）

▼旭川地区
旭川五条教会

▼釧路地区
釧路教会・帯広教会

▼北見地区
北見教会

▼函館地区
宮前町教会

▼苫小牧地区
苫小牧教会

（但し、勅書に書かれているように、各教会にしかるべき扉が常設されているわけではありません。）

(2) ゆるしの秘跡と免償

聖年の間できる限り、ゆるしの秘跡に授かることができるよう配慮されますが、昨今司祭が常駐せず、あるいは兼務など司祭不在の場合が増えています。したがってゆるしの秘跡は上記以外のどこの教会でも受けることができます。

「免償」については勅書47ページに教皇庁内赦院の説明にある通りです。いつくしみの扉の教会を巡礼で訪れてミサに与り、通常の条件（ゆるしの秘跡、聖体拝領、使徒信条、教皇の意向のための祈り）を果たし、罪への傾きから離れるならば、全免償が与えられます。

(3) 教皇フランシスコ『希望は欺かない』～２０２５年の通常聖年公布の大勅書～を読み、黙想する。

教区宣教司牧評議会

11月2日、札幌教区カトリックセンターにおいて、教区宣教司牧評議会が開催された。各地区評議員からの状況報告の他、勝谷司教からは、新たに発行された司教団文書『見よ、それはきわめてよかった』の紹介があり、信徒及び司祭間で本書の読み合わせが推奨された。また、10月14日に開催された「札幌教区のシノドスのつどい」の報告では、その中で行われた、シノドスで推進されている「霊における会話」体験が紹介された。これは分かち合いの新しい手法で、グループとして「識別」をする手段にもなりえる。これからの教会において、とても重要で有用な手法として、教区の中でも推進していくことが確認され、今後はシノドス・チームが必要に応じて支援を行うことが報告された。（札幌教区宣教司牧評議会運営委員長・佐久間力神父）

札幌教区のシノドスのつどい

今年3月に「日本のシノドスのつどい」が東京で開催され、この流れを北海道で展開するための札幌教区主催の取り組み、「札幌教区のシノドスのつどい」が10月14日(月・祝)、札幌教区カトリックセンターにおいて開催され、道内6地区から各地区長(及び代理)と信徒が集まり開催されました。参加したのは勝谷司教、実行委員長である佐久間師含め司祭7名、信徒18名、実行委員6名でした。講師として日本シノドス特別チームのメンバーである大阪高松大司教区の教区司祭、高山徹(あきら)神父をお招きしました。

高山師からはご自身が参加された今年4月にローマで開催された「小教区司祭のシノドス」のこと、その分かち合いからもたらされたことについて、お話を聞きました。

それから6グループに分かれ、テーマを「わたしが神様に与えられるもの」として、「霊における会話」による分かち合いを行いました。それぞれのテーブルには実行委員がファシリテーターとして入り、発言時間はスクリーンにストップウォッチを映して全体をタイムキープしました。第1ステップはひとり3分、第2ステップは2分ずつ話し、昼食を挟んでの第3ステップでは付箋を使ってグループ毎にまとめを行いました。

つどいの最後に勝谷司教から「聖霊の導きは時として一般的な考えからすると不合理で、民主的な選択とは思えない場合もある。北見地区の紋別教会はかつて信徒の減少や聖堂の維持負担から閉堂やむなしの方向で話し合いがされていたが、『このオホーツクの地にカトリック教会を残すべきではないか』という意識が信徒に芽生えたことで存続となった。当時この決断は合理的で効率の良い選択ではなかったはず。しかしその後、技能実習生として来日する外国籍信徒がたくさん集う教会となった。」とのお話がありました。最後に参加者全員が北一条教会聖堂で祈りを捧げ解散しました。

このつどいのあと、参加した信徒の方々から「所属する小教区で霊における会話をしてみることになりました」「チームの方に来てもらえますか？」といった連絡がありました。向き合わなければならない小教区合併問題について、この手法を用いてみたいとの声もありました。

つどい実行委員を担ってくれた皆さんによる「札幌教区シノドス・サポーター」も立ち上がりました。みなさんの共同体で「霊における会話」をやってみる段階に入りました！　どうぞ札幌教区シノドス・チームまでお気軽にお問い合わせください。■問合せ先メール　Sapporo.synod@gmail.com（札幌教区シノドス・チーム　荒木関　充）

全国担当者会議報告

カリタスジャパン

10月9日から10日にかけて、名古屋教区金沢教会を会場に、カリタスジャパン定例全国教区担当者会議が開催されました。

今年の定例会議の議題は、昨年から行われてきた「Together Weキャンペーン」の各地での報告、2023年度の「四旬節キャンペーン」と「国内援助支援状況」の報告という国内に関するカリタスジャパンの取り組みが話し合われました。カリタスジャパンというと国際的なイメージを持たれがちですが、国内支援に多くの力を注いでいることが改めて情報共有され、活発な意見を通してもっと力強くアピールすることが確認されました。

また、今回金沢で行われたため、能登半島の災害についての現状報告と現地視察も行われ、有意義なものとなりました。特に七尾・輪島地域では、復興状況が依然として4～15%でとどまっており、引き続き支援の手と祈りが必要であることが確認されました。9月の洪水により二重の打撃を受けた現地の人々の心は折れかかっており、今こそ支援の手を差し延べる時期でもあるとの声が上がりました。現地の状況を視察しながら、各教区で改めて現状を伝える必要性が共有されました。

札幌教区においても、何らかの方法で皆さんに伝えていく事ができればと思いながら会議を終えました。なお、引き続き復興支援のための献金は、カリタスジャパンに『能登地震』と明記してお振込みください。

（カリタスジャパン札幌教区担当司祭・松村繁彦）

画像上/カトリック金沢教会でのミサ
画像中/被害と支援の説明を聞く
画像下/被災地応援の横断幕
画像右/国道359号線の被害

全国広報担当者会議

10月21日から22日にかけて、カトリック中央協議会マレラホールにおいて全教区広報担当者会議が開催されました。

初日のテーマは「広報をめぐる法律の基礎知識」と題され、日本カトリック司教協議会顧問弁護士による講話が行われました。著作権を含む広報に関する諸法律について学び、さらにワークショップ形式で現実に直面する問題について法的観点からの検討が行われました。また、AIによる回答の限界なども教会的な対応として議論され、有意義な時間となりました。

翌日には、酒井司教によるバチカンにおける広報組織の仕組みや課題についての講演が行われました。これを受け、カトリック新聞が今まで通りに手元に届かなくなる現状の中で、各教区がどのように世界の動きを伝えるかが話し合われました。さらに、各教区が抱えるマンパワー不足や、最新技術を活用した有効な手法についても情報が共有されました。

札幌地区では、10月12日教区カトリックセンターにおいて松村神父による広報についての講話が行われ、広報の役割として「神と人、人と人を繋ぐ」重要性が強調されました。これを通して、より多くの情報を持たない人々に繋げる大切さが伝えられました。各地区においても必要に応じて情報提供を行うので、教区事務局までお問い合わせいただければと思います。（札幌教区広報委員長　松村繁彦）

全国典礼担当者会議

9月9日から11日に、札幌教区カトリックセンターで全国典礼担当者会議が行われた。北は開催地の札幌教区から、南は那覇教区まで15名の典礼担当者と9名の日本カトリック典礼委員会のメンバーに加え、札幌教区開催ということもあり札幌教区から5名の信徒、2名の修道者、5名の司祭がオブザーバーとして参加した。

今年は教皇フランシスコの使徒的書簡『わたしはせつに願っていた』を受けて典礼による養成についての理解を深めることを目的としている。全体の内容は第二バチカン公会議の典礼刷新の根本と方向性に立ち戻る重要性を述べるものであり、典礼の美しさを再発見し続けるように促すものである。

書簡の概要は次のとおりである。典礼はすべての人々の救いのためにある。したがって、誰もがミサに招かれていることを認めようとしない二つの傾向について教皇は警告を発している。一つは自分たちの理論を他者に押しつけ、これこそが正しい典礼であるとすること、もう一つは自分の限界を認めず、何でも自分の意志で行うことができるとすることである。典礼は神からの贈り物であって、一緒に過越しの食事をしたいと望まれる主とともに典礼に包まれるようにしよう、と教皇フランシスコは述べておられる。

各委員からの個別の解説が行われ、最後に日本カトリック典礼委員会委員長の白浜司教から今後の展望について話された。教皇は「皆さんに、わたしたちの道をたどるためのさらなる指標を残しておきたいと強く望んでいる」。「典礼暦年と主日の意味を再発見するよう、皆さんに勧め」ている。「この二つは、公会議がわたしたちに残したものでもあ」る。（63項参照）

2025年は9月8日から10日の間、御聖体の宣教クララ修道会軽井沢修道院で開催される。（札幌教区典礼委員会委員長・佐藤謙一）

神学生養成担当者会議

10月23日から25日にかけて、日本カトリック神学院で全国神学生養成担当者会議が行われた。今年から福岡カトリック神学院と東京カトリック神学院が一つの神学院となり、東京都練馬区関町に日本カトリック神学院として再興した。現在、全国15教区から19名の神学生が一つの学び舎で生活し司祭叙階を目指している。

今年の話題として、来年度から神学校のカリキュラムが変更となることが話された。どのように変わるかは下の表を見てもらいたい。

これまでは神学科4年に入る前に助祭叙階されて神学科4年の助祭コースで学ぶことになっていたが、来年度からは助祭叙階されずに神学科4年に進級し、助祭叙階準備コースで助祭叙階に向けて学ぶことになる。神学院修了後に助祭叙階を受ける。次の司祭叙階を受けるまでの期間は最低6か月となる。これは司牧研修課程と呼ばれ、各教区において司牧生活の導入と司祭職の準備をする期間となる。司祭叙階まで最短で7年半かかることになる。

神学生の司祭叙階までの道のりは長いが、皆さんの祈りと支援によって支えていただければと思う。（札幌教区神学生養成委員会委員長・佐藤謙一）

	変更前（2024年度まで）	変更後（2025年度から）
予科（1～2年）		
哲学科1年		
哲学科2年		
神学科1年	助祭・司祭候補者	助祭・司祭候補者
神学科2年	朗読奉仕者	朗読奉仕者
神学科3年	祭壇奉仕者	祭壇奉仕者
神学科4年	助祭叙階 （助祭コース）	祭壇奉仕者 （助祭叙階準備コース）
神学院修了（2月）	司祭叙階	助祭叙階
7月最終週		司祭叙階前の特別講習 （案）
8月～9月以降		司祭叙階 （助祭叙階後6か月以降）

聖年マスコット Luce（ルーチェ）をよろしくね

Luce（ルーチェ）は、イタリア語で光を意味する言葉。「Holy Year（聖年）」のマスコットで、キャラクター設定は巡礼者。2025年の聖年のテーマ「希望の巡礼者」になぞらえたものだ。また、大阪・関西万博においてバチカンはイタリア館の協力を得て展示やイベントを行う予定になっており、ルーチェはその〝顔〟にもなるという。デザインを担当したのは、日本のポップカルチャーを愛するイタリア人アーティストのシモーネ・レーニョさん。バチカンで行われた記者会見でルーチェを披露した。（ローマ教皇庁情報ポータル『VATICAN NEWS』の配信動画より）

一粒会の設置、まもなく

一粒会設置発起人代表　松村繁彦

札幌教区の司祭不足と高齢化は加速度的に進み、宣教司牧体制に問題を与えています。道内６つの地区はそれぞれ同じ悩みを抱え、打開策もありません。地区の再編や小教区のグループ化などハード面ではいろいろな案が出ても、実質的な方策は生まれてきません。明るい兆しは見えなく、規模縮小に目が行きやすい状態になっています。

しかし、こんな時こそ時のしるしはあるのではないでしょうか。それは教会の使命としての、“刈り入れる者”つまり司祭や修道者を増やそうという動きは、今だからこその動きではないでしょうか。今を“踏ん張りの時”と捉え、“将来への希望”を生み出していく活動も必要と感じて、「一粒会（いちりゅうかい）」の設置を提案しました。日本のキリシタン史を思い起こし、司祭の来ることを待ちわび、祈りをささげた先人たちの思いに心を合わせ、これこそ「先人の信仰から受けた時のしるし」をくみ取った札幌教区としての一つの動きとなればと思います。

●「一粒会」とは

1938年に東京大司教に任命された土井辰雄師の司教叙階式に参列した信徒たちの数人が、司祭召命と養成のために「何かをしなくては」と思い立ったのが一粒会発足のきっかけとなりました。その頃、軍国主義の高まりによって外国人宣教師たちに対する迫害や追放など、教会にもさまざまな圧迫があり司祭召命に危機感を抱く信徒が少なからずいたのでした。

当時の一粒会の規則は、司祭召命のために毎日「主祷文（主の祈り）」を一回唱え、祈りのあとに1銭（1円の百分の一）を献金するというものでした。一粒会という名称は「小さな粒を毎日一粒ずつ貯えていく実行、しかも行いを長続きさせるということを考慮に入れての命名」だったそうです。

戦中・戦後、途絶えていた一粒会の活動は1955年頃に復活し、現在に至っています。東京大司教区の「一粒会」の会員は教区民全員です。会長は大司教です。

（東京教区HP参照　https://tokyo.catholic.jp/ichiryukai/）

全国で活発に一粒会組織として活動しているのは、東京大司教区、横浜教区、大阪大司教区ですが、一粒会会計はどの教区にもあり、また修道会単位でも献金・寄付金活動を行っているところもあります。

●札幌教区における「一粒会」

今までは、札幌教区司祭が担当する教会や、修道会に委託されている教会などで一粒会への献金がされてきました。しかし今回の一粒会の設立には、札幌教区司祭・助祭の召命だけに限らず、北海道で働くフランシスコ会の修道者・司祭召命、また海外から協力者として来られる外国籍司祭の養成も含められます。幅広く神の国への奉仕のために働く、司祭・助祭、修道者、神学生を助ける目的で設置します。今こそ北海道の福音宣教司牧を担う方々の養成と、召命を求める祈りは信者の務めではないでしょうか。若い人たちに私たちの祈る姿、支える姿を示しながら、自分もそのあとをついて行きたいという弟子が増えるよう、準備を始めていきましょう。

本来の一粒会は信徒による活動であるのですが、札幌教区の一粒会は信徒も司祭も修道者も、一丸となって突き進まなければならないほど緊急性を帯びています。そこに立場など関係なく、一緒に歩んでいく一粒会こそが札幌教区一粒会の特徴なのです。

●「一粒会」の規約と、召命を求める祈り

2024年6月の教区宣教司牧評議会において、『カトリック札幌司教区一粒会規約』が承認され、2025年4月施行に向けて最後の準備に入っています。札幌教区の皆さんの手に渡るように、規約と教区司教公認の祈りを準備し、献金案内を新たに作成し、一粒会を献金事業だけでなく、活動としても行っていけるようにしています。何よりも大切なことは、皆さんの心を一つにして召命を求め、司祭・修道者を増やし、同伴してくれる司牧者を獲得することです。先行きが厳しい時にこそ、この活動は力を付けていかなければなりません。司祭はどこからか降ってくるものではありません。神学校から割り当てられるものでもありません。自分の教会から司祭・修道者召命を出さなければ、その還りもないのです。

どうか意識をもって、司祭・修道者を育て、召命を感じている人々を支える会にしていただければと願います。

カトリック生徒全道大会
～茅部郡森町～

10月17日㈭～18日㈮、ネイパル森（茅部郡森町）を会場に、カトリック生徒全道大会が開催された。函館白百合学園高等学校が当番校を務め、道内7校（函館白百合学園、函館ラ・サール、海星学院、札幌光星、旭川藤星、北見藤）がカトリック校同士の交流を深めた。

講師に李動珍（アンセルモ）師（韓国・馬山（マサン）司教区）をお招きし、「日韓関係」と「平和について」をテーマに2つの講話をいただいた。講話の中では、「皆さんの世代が希望です。互いに理解し受け入れることのできる世代です。今から始めることができます。」「受け入れることだけではなく伝えることも大切です。」と話された。講話後は、国と国、人と人、平和などについて意見交換し、自分たちにできることは何かを分かち合いを通して考えた。特に、李神父からの先のメッセージが生徒たちに響き、「希望である」との言葉に励まされ、活発に意見交換を行っていた。

ミサでは、平和への思いをグループごとに共同祈願としてささげ、聖体拝領時には、一人ひとりの生徒に李神父が祝福を下さり、生徒たちは少し緊張しながらも嬉しそうな様子を見せていた。

大会は終始和やかな雰囲気に包まれ、最後まで別れを惜しんで交流する生徒たちの姿が心に残った。

（旭川藤星高校教諭　金子理沙）

カトリック中学高等学校連盟
2024年度秋季委員会

去る11月21日、標記委員会が開催され、勝谷司教、道内でカトリックの中学・高校をもつ8校の校長、品田（カトリック教育担当事務局）がカトリックセンターに集まった。日本カトリック小中高連盟代表委員会の報告、本連盟内の今年度事業活動報告や中間決算の報告に加え、来年度の事業計画について話し合われた。

勝谷司教からは、『見よ、それはきわめてよかった―総合的なエコロジーへの招き』（日本カトリック司教団）や近日発行される冊子『すべてのいのちを守る教会をめざして―ハンセン病問題　過ちを繰り返さないために』（カトリック司教協議会社会司教委員会）が紹介され、カトリック学校においても、このような教会からの呼びかけを取り上げる機会がもてればと話された。

当連盟は、春季委員会（校長会）・総会（校長先生と宗教科の先生方を交えての会議）、教職員研修会、生徒全道大会、秋季委員会（校長会）、「連盟だより」発行などを全道規模の主な年間行事としている。これからもカトリック教会と連携をとりながら、時代と社会の変化を考慮しつつ、生徒たちの内なる軸を形成するカトリック教育に励めるよう、当連盟の横の繋がりも大切にしていきたい。（品田典子）

教区事務局からお知らせ

■教区事務局年末年始休
12月28日(土)～1月5日(日)
1月6日(月)より通常業務を行います
なお、業務時間は月曜から金曜の平日
12:00～13:00を除く9:00～17:00

ともに生きる
サイレントマジョリティ

昨年の世界難民移住移動者の日（9月29日）の「聖書と典礼」に記載されていた李善姫（イ・ソンヒ）さん（仙台教区信徒）のコラム「サイレントマジョリティにならないで」にとても共感した。全文をここに掲載したいくらいなのだが、その一部をお伝えしたい。

＊「構造的差別」を変えられるのは、この社会のマジョリティです。いくらマイノリティの人たちが声を上げるとしても、マジョリティが動かないと社会は変えられません。＊引用した聖書の箇所は「レビ記19章33節」だった。まずは小さくされた人の声に耳を傾け、何が起きているか知ること。そして、大事なのはその次である。自分ができることを見つけて動き出すことである。一方で、気をつけて欲しいことがある。

先日、面識のない新聞記者から突然連絡が来た。オホーツク管内斜里町の川でサケを密漁したとしてベトナム人が逮捕されたという。その記者はSNSを利用した「闇バイト」だと言い、このような事例が他にあるかと聞いた。本人が「闇バイト」と言っているのか、川でサケを釣ることを密漁だと知っていたかを確認したのかと聞くと、それはわからないと言う。彼らは、「闇バイト」という言葉が流行るずっと前からSNSを利用して仕事を探している。SNSでの仕事探しはリスクを伴うので、気をつけるよう注意喚起されているにも関わらず、探すのはなぜだろうか？外国人がコンビニに置いてある求人雑誌やハローワークで簡単に仕事を探せると思っているのだろうか？記者は、どこまでベトナム人の背景を知っていたのだろう。

声を上げるマジョリティの中には、自分たちの知ったことを事実としてマイノリティを差別するような発言をする人がいる。そのような人々に対して、あなたはどんな態度を取るだろうか？彼らの発言は自分と関係のないことと見て見ぬふりをする人もきっと多いだろう。「サイレントマジョリティにならないで」という意味は深いと思っている。

（札幌教区難民移住移動者委員会・西　千津）

世界難民移住移動者の日 インターナショナルミサ

9月29日～30日、仙台教区の元寺小路教会でインターナショナルミサが開催されました。世界難民移住移動者の日でもありJ-CaRM主催の全国研修会も行われました。

テーマは「心も思いも一つに～国籍を越えた共同体をめざして～」です。28カ国の出身者が集い、聖書朗読や聖歌も様々な言語によるものでした。多言語の聖歌は言葉がわからなくとも心の奥底から共鳴し感動で涙が溢れました。研修会では一部通訳を交え「やさしい日本語」で行われました。ベトナム・フィリピン・カナダ・日本の司牧者や宣教者、信徒の方々が発表され、未来の日本の教会への道筋を見た思いがしました。教会の典礼部や聖歌隊に外国籍の人も参加されており、息吹溢れる様子や外国籍の方々が直面する課題へ積極的に関わっておられました。

仙台教区はフィリピン出身のガクタン司教で、事務局長はメキシコ出身のイグナシオ神父が担っておられました。また最近増加する外国籍の若者にとっても、宗教の違いを問わず集まる場になっていました。教会が地域に開かれた活動をしている様子が伺え、日本社会の中に、この様な安息の場が広がっていきますようにと祈りました。

（手稲教会　徳能恵子）

教区ハラスメント対応デスクからのお知らせ

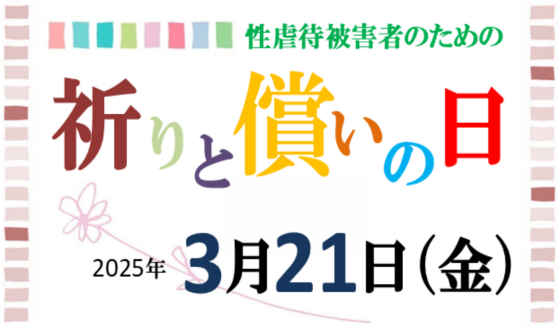
2024年11月より、教区ハラスメント対応デスク（以下デスク）担当者が変わり、西千津・菊地秀治の2名体制から、松村繁彦（司祭）、梅原公子（手稲教会）、西田敦子（月寒教会）の3名体制となりました。今後は啓発活動やデスク窓口として対応をしてまいります。

また、以前より非公開として札幌教区はハラスメント対応委員会を設置し、デスクに寄せられた案件について対応協議を行い、相談者と共に解決に向けた取り組みを行っております。教会においてハラスメントが無くなるよう、皆様の意識の変革を求め、良い関係を築き、安心して信仰生活、社会生活が送れるよう対応していきたいと思います。

デスクでは今後の啓発の一環として、教区ニュースに広告を載せ続け意識づけを行ってまいります。同時に、各教会からの依頼を受けて、研修や祈りの集いなどにも応じてまいりますので、どうぞ遠慮なく、デスクまでご連絡ください。

なお、毎年四旬節第2金曜日は「性虐待被害者のための祈りと償いの日」が設定されています。当日、またはその前後の日曜日などで、被害にあった方々のために祈りをささげ、教会全体で償い、また理解を深めていただきますようお願いいたします。これは「可能ならば」という事ではなく、「教会としての務め」として位置づけられているものです。どんな形でも結構ですので、教会単位、地区単位で実施に向けて検討してくださることを期待しています。取り組みについてのご質問やご相談はデスクが対応しておりますのでお問い合わせください。

（札幌司教区ハラスメント対応デスク担当司祭・松村繁彦）



カトリック札幌司教区
ハラスメント対応デスク

080-2879-3168

火曜～金曜　12:00～16:00
祝日及び夏季冬季休業日除く

✉ sapporo.harassmentdesk@gmail.com

ネットワークミーティングin名古屋

9月21日(土)～22日(日)、名古屋市内にある八事聖霊修道院聖霊ミッションセンター（名古屋市昭和区八事本町1）において、カトリック青年連絡協議会「第47回ネットワークミーティング（NWM）in名古屋」が開催され、18才から35才までの青年および青年司牧に携わる司祭・修道者など、全国から70人が集まりました。北海道はすっかり秋模様なのに現地は30℃を越え暑かった。

今回のテーマは「どうするイエズス」。前半は今年始めに起こった能登半島地震で被災した地域の現在や、被災者支援の経験談を聞き、「どのように他者に寄り添うか」をテーマに分かち合い、辛い時に寄り添ってくれる人がいることによる安らぎと、寄り添う側にも様々な悩みや障害があることを認識することができました。

後半は視点を少し変えて「イエス様ならどうするか」を分かち合い、模範としてのイエス様を深く考える時間となりました。

最後、松浦司教のお説教では、「私たちは常に選択をして生きている。イエス様に訊くということは自分がどうしたらいいかを考え選択しているということなんだ」という言葉が印象的でした。世界中に助けを求める多くの人がいる現在、どのような寄り添い方ができるのか、イエス様に訊きながら、すなわち「私」ならどうしたらいいかを考え、その選択肢を見つけていきたいと思いました。

（小樽教会 秋元惇（じゅん））

【札幌教区の青年会活動】
札幌地区を中心に全道の18歳～35歳の青年で構成。約2ヶ月に一度、青少年委員会が開催され、司教、担当司祭（佐久間力・千葉充）、高校生会（通称カト高）担当リーダー、青年会代表が集まり、各々の活動の進捗や予定の共有、違う立場から相談しあったりしている。

訃報

◆殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

Sr.M.アンジェリーネ
菊地トシ

11月9日午後0時45分、老衰のため花川マリア院にて神様のみもとに召されました。94歳。

【略歴】
1930年1月23日生まれ
1956年5月19日受洗
1963年3月25日入会
1972年8月12日終生誓願
2015年11月23日誓願金祝

Sr.M.アンジェリカ
佐藤幸子（こうこ）

11月18日午前1時52分、嚥下性肺炎のため、月形町立病院にて神様のみもとに召されました。89歳。

【略歴】
1935年10月4日生まれ
1955年8月13日受洗
1960年9月12日入会
1968年8月12日終生誓願
2022年11月3日ダイヤモンド祝

編集あとかたり後語

昨年、北部の教会に赴任することになり、そこから1年半余りを過ごしていく中で、あちこちでの仕事をさせていただくので、かなりの距離を運転しています。しかし、それは大変なことばかりではなく、北海道の自然の豊かさや美しさを肌で感じながらの移動でした。時には音楽を聴きながら、あるいはラジオを聴きながら、ある時は祈りながら、そしてある時はミサでの説教を考えながら移動しています。そんな時間は、運転という非生産的な行動の時間をとても豊かな時間に変え、自分の中に積み重なってくれている気がします。宣教師の神父たちも、かつては馬に揺られながら、あるいは歩きながら、あちこちを回ったんだろうなと思いをめぐらすこともしばしば。これまでも、そしてこれからもこの土地には教会があるんだろうなと想像しながら、「今の時代の宣教」とは何だろうという思いが去来します。（佐久間力）

クリプト札幌

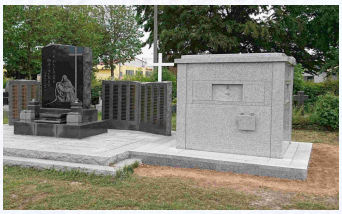
カトリック札幌司教区納骨堂

札幌教区カトリックセンター地下
家族壇568区画・合葬壇730
天候問わずいつでも墓参可能

白石共同墓

札幌市白石区平和通10丁目北5-1
札幌市白石本通墓地

札幌教区の司祭・修道者・信徒ならびにその家族を対象とした合葬墓



白石共同墓増設部は2023年6月に完成、2024年より納骨開始。
納骨期間は原則4月から11月まで。
（積雪期間は納骨は行いません）

お問い合わせ　〒060-0031　札幌市中央区北一条東6丁目10　札幌司教区本部事務局
電話：011-241-2785　FAX：011-221-3668
平日12:00～13:00を除く9:00～17:00　（土曜日曜祝日及び夏季冬季休業を除く）